

早くも西欧コレクターから熱視線 制作依頼も殺到し 大ブレイクの予感

浅田淳一



展示会に先立ち、在ドイツ日本国大使館で開かれた歓迎の宴でスピーチする平松礼二氏



ヴェルニー印象派美術館の招聘による『平松礼二・睡蓮の池 モネへのオマージュ』展開催の快挙から半年余りが経ち、今回私は同美術館に買上げられた作品群による、ドイツ・ベルリンでの巡回展示に同行させて頂く機会に恵まれました。

この巡回展はベルリン国立アジア美術館と在ドイツ日本国大使館との主催で、開幕前日には中根猛駐独大使をホストとする大使館での歓迎の宴が開かれ、私もお招待頂きました。

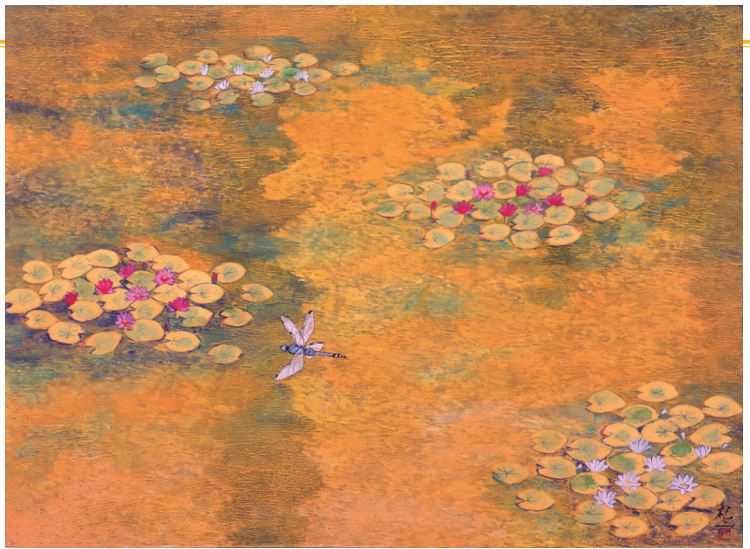
大使館のレセプションルームに入りますと、ド

イツに所縁のある東山魁夷画伯の作品と共に平松先生の作品が並び、日本から同行の私たちは晴れがましい気持ちで共有いたしました。また、大使館に招かれること自体稀な私どもにとりまして、先生の栄誉のご相伴にあずかる貴重な体験となりました。

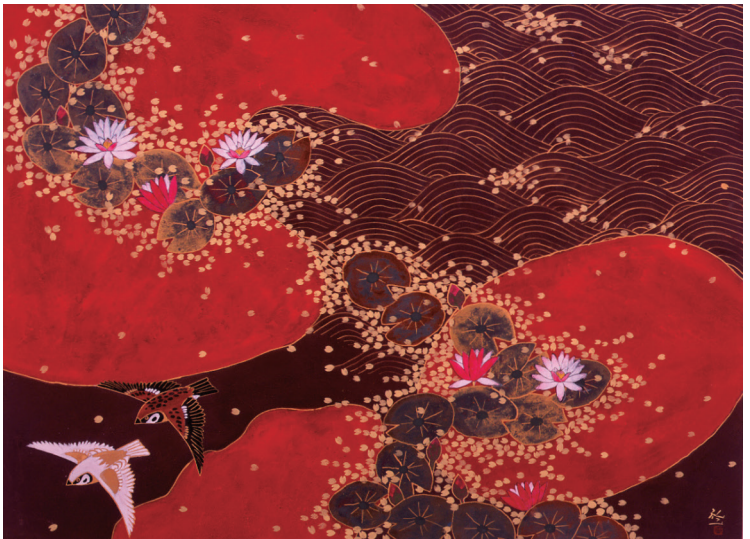
翌日にはオープニングレセプションです。展覧会会場のベルリン国立アジア美術館は秀逸なアジア美術のコレクションを展示する素晴らしい殿堂でした。セレモニー後、会場での先生自身による作品解説には200人を超える愛好家が押し寄せ

熱気に包まれました。

翌々日はベルリン日独センターで、平松先生が日本より持参された現在制作に用いている道具、画材を前にしての講演会です。満員盛況の会場では、岩絵具・墨・膠・箔等を参加者が実際に触れて質問ドイツの方々の熱心に驚かされつつ、これで3日間の公式行事が



出品作から《蜻蛉舞う池》
(53×72.7cm/2011)と
《すいれん図・遊》
(72.7×100cm/2011)。
2点ともジヴェルニー印象派美術館蔵



終了しました。

またこの3日間を通してご多忙であろう中根大
使夫妻が先生をフルアテンドでもてなされました。
このことは大使の平松作品への理解と尊敬、また
大使館文化部門の「平松芸術を通し日独文化交流
を深めたい」という熱意の表れだと感心いたしま
した。

ここで市場の話題を少し。地元ディーラーの話
では、ジヴェルニーでの個展開催以降、西欧人コ
レクターが50号から80号の作品を既に10点以上購

入しているとのこと。公立美術館の買上げ收藏が、
購入する安心感に繋がっているという側面はある
ものの、このことは平松作品の装飾性、デザイン
性、遊び心が文化の異なる彼の地でもしっかり受
け入れられ、日本画から世界画へととして評価され
ている証であると思われまます。

私は25年前に先生の新しい挑戦であるニュー
ヨークシリーズのための取材旅行に同行いたしま
した。その折、MOMA（ニューヨーク近代美術
館）でピカソ、ブラック、キュービズム展を一緒
に鑑賞いたしました。短期間に制作された400
点もの作品群を前に先生ご自身は随分ショックを
受けられ「世界に認められ後世に残る作家になる
ためには、これ程までにハイレベルなクオリ
ティーの作品を、これ程までに沢山描かなければ
ダメなんだなあ」と話されたのを思い出します。

マーケットの維持には、作品の高い質と作品の
量（数多く制作出来る作家の能力）の両面が必要
とされます。が、それこそ平松先生の真骨頂です。
国内市場に於いても言うに及ばず、現在作家のも
とには150点を超える制作依頼が殺到している
との情報もあり、ブレイクの兆しを感じます。

平松芸術の醍醐味、伝統的様式美と強い個性の
革新的作品が、国際作家として次々に他の国々に
紹介されていくことを期待いたします。と同時に
私は、平松先生の次のシリーズへの展開、新たな
挑戦も楽しみにしております。

ベルリン国立アジア美術館での展覧という栄光
の時をご一緒させて頂けた幸運に感謝いたします。

（株式会社 梓 梓美術代表取締役）

Information des Bildhauer aus Japan's 3. Sakaba
Für die Ausstellung im Rahmen der Initiative
mit einem vom 20. Juli 2014 bis zum 22. August 2014
Zweck: Die Kunst der japanischen Künstler zu
den internationalen Kunst- und Kulturbeziehungen zu fördern.

A world great pleasure that we present of the exhibition
of the Japanese artist Hiramatsu Reiji in the
collaboration with the German artist Jochen
Kühn. The exhibition is part of the initiative
to promote the international art and culture relations.

in der Ausstellung "Seerosenbilder (2014) und 2014
entworfenen Bilder unter dem Titel "Hommage
à Monet" (2014) in Zusammenarbeit mit dem
deutschen Künstler Jochen Kühn. Die Initiative
hat zum Ziel, die internationalen Kunst- und
Kulturbeziehungen zu fördern. Die Ausstellung
ist Teil der Initiative, die internationale Kunst-
und Kulturbeziehungen zu fördern. Die
Ausstellung ist Teil der Initiative, die
internationale Kunst- und Kulturbeziehungen
zu fördern. Die Ausstellung ist Teil der
Initiative, die internationale Kunst- und
Kulturbeziehungen zu fördern.



展覧会場入口にて。左
から平松礼二氏、在ド
イツ特命全権大使・中
根猛夫妻、クラス・
ルイテンビーク館長、ア
レクサンダー・ホフマン
担当学芸員

「昨年パリに近いジヴェルニー、今年ベルリンと、世界の代表的な文化の中心地で個展を開けるとは夢にも思わなかった」と緊張した面持ちで述べた。遠巻きに聞きながら私は、雑談交じりに平松が不安げに語っていた言葉を思い返していた。「フランスとは違って印象派への関心も浸透も希薄なドイツで、『モネへのオマージュ』を謳う個展が、作品がどのように受け止められるのか……」

ド イツの首都ベルリン国立アジア美術館で、『平松礼二展 睡蓮画・モネへのオマージュ』が開催中だ。フランスのジヴェルニー印象美術館で昨夏開催され、同館始まって以来最高の7万4000人の観客が訪れるなどフランス内外で話題を集めた『平松礼二・睡蓮の池 モネへのオマージュ』展は、今なお記憶に新しい。展覧会終了後、ジヴェルニー印象美術館のコレクションとなった同展への出品作などから厳選し、紹介している。活躍中の日本人作家が国立アジア美術館で個展を開くのは3人目、日本画家としては東山魁夷に次いで2人目の快挙である。

ベルリン空港に到着するや否や、平松は同じ便で来るはずの日本画家が届いていないという思わぬハプニングに見舞われた。日本画になじみのないドイツの人のため、会期中に行う講演会（日本画について説明する）にぜひ必要な画家だけに、一時はどうなることかと平松もやきもきしたようだ。幸い翌日には画家も到着し、ジヴェルニー印象美術館での個展を見た国立アジア美術館のクラス・ルイテンビーク館長らが「是非、ドイツでも！」と熱望し、実現した本展は開幕した。

と、その前に、ベルリン国立アジア美術館とともに本展を主催する在ドイツ日本大使館で開かれた前夜祭とも言える歓迎の宴に触れた。平松夫妻やルイテンビーク館長、同大使館の中根猛・

1994年にパリのオランジュリー美術館でモネの大壁画『睡蓮』に出会って印象派を再発見以来、平松はジヴェルニーにあるモネの家を毎年のように訪ね、傑作が生まれる舞台となった庭や池のほとりで創作を続ける。同じ景色を見つめながら、まだ見ぬ人と、永遠に会えぬ人と語り合う機会を得たのである。今も人々を魅了する印象派に美の根源を問いつつ、新古を超えた普遍の芸術を、東西を奔放に往還するなかで深めた思索の視覚化を試みる。

四季折々の情趣が
ドイツ人を魅了
～『平松礼二展
睡蓮画・モネへのオマージュ』を見て
石川健次



大勢の来場者を前に作品解説する平松礼二氏

印象派の故郷であるフランス、そこに暮らす人たちにとって、昨夏披露された平松芸術に息吹く面影、否、面影を打ち消すかのように時空を超えたダイナミズムのなかに紡がれる清新な魅力は、さぞかし刺激的に映っただろう。2009年の開館以来最高の来場者を記録したのは、ほかならぬ証左に違いない。だが瞬間の印象をまばゆいほどの色彩と流麗な筆触で描いた印象主義は、ドイツでは「圧縮されるようなかたちで短期間に展開し、そのまま今世紀の表現主義の運動に直接つながっていった」（神林恒道「ドイツにおける印象主義の展開」Ⅱ『世界美術大全集』）。平松が言うように、関心も浸透もフランスとは比べようもない。でも平松の不安は、文字通り杞憂に終わるだろう。本展をつぶさに見て、美術館など現地の関係者らに話を聞いた私の率直な感想である。



講演会后、興味深げに日本画材に触れる来場者

国立アジア美術館の1階ロビーで行われた開幕式では、あいさつした平松の「名調子」が喝采を浴びた。かいつまむと——ジヴェルニー印象派美術館での個展終了後、全出品作を含む80点が同美術館のコレクションに加わった。そのなかには、20年に及ぶ「印象派への旅」のなかで自身が履き続けた靴を描いたドローイングが含まれる。自分をまさに足元から支えてくれた靴に感謝の気持ちを含めて、現地で描いた。デザインが気に入って買った靴だ。でもとても丈夫で、これだけ長く履き続けるとは思わなかった。持参したその靴を頭上に掲げ、平松は大きな声で言った。「実は、ドイツ製です」——不思議な縁に戸惑い、感謝しつつ、平松はこれからも大事に履き続けるのだろう。琴とフルートのコラボレーションによる優しき力強い演奏が披露され、平松を囲んで威勢よく鏡

割りも行われるなど終始華やかな雰囲気にも包まれた式が終わると、いよいよ開幕である。ジヴェルニー印象派美術館での個展のあとに新たに描かれた追加で同美術館に購入された六曲一雙屏風の《モネの池 微風》や同美術館での個展で人気を集めた四曲一雙屏風の《水と樹と睡蓮の交響楽》を中心に、選りすぐりの14点である。作品を前に行われたギャラリートークでは平松の周りに大勢が一斉に押し寄せ、出遅れた私は輪のなかに加わることをあきらめ、遠くから聞き耳を立てた。笑い声や歓声にかき消されて平松の話はほとんど聞き取れなかったけれど、締めくくりの言葉ははっきり聞こえた。「装飾性、デザイン性、そして遊び心の3つを、私は最も大切にしています」

装飾性やデザイン性、さらに抽象性、平面性など日本美術に伝統的、特徴のないっさいを継承しつつ、東西の往還など多様なダイナミズムのうえに平松は洗練を、変奏を希求する。「平松芸術の一番の魅力はどこ?」。雑沓する会場でルイテンビーク館長に聞いた。館長は「モネの影響を受けながら平松は独自の芸術をばぐくんだ。そのモネは日本の浮世絵の影響を強く受けている。ダイナミックな東西の往還が生んだ芸術という点で興味深い」。時空を超えたダイナミズムに魅力の一端を感じているのは紛れもない。「でも……」と館長は言葉を継いだ。「鮮やかな色彩、巧みな色づかいに魅かれる。ジヴェルニーで私が心打たれたのもそこだ」

担当学芸員のアレクサンダー・ホフマン氏にも同様の質問をぶつけた。平松の作品には四季折々



の季節が端的に、そして深い味わいで描かれる。まるで和歌を詠んでいるような印象を覚える」。流暢な日本語を駆使してホフマン氏は話した。さらに「日本の現代絵画としてドイツの人をきっと魅了するでしょう」とも。それは、たとえば時空を超えたダイナミズムなどの背景とは無縁に平松芸術はドイツでも異彩を放つ、というふうに私には聞こえる。

会場では出会ったスイス在住のアメリカ人女性、クラリス・モルガンさんの話も印象に残る。モネが大好きだというモルガンさんは、作品の舞台となったモネの庭を見るために訪ねたジヴェルニーで平松の個展を偶然見た。「モネに出会ったときと同じくらい感激しました」。その後、平松の作品を購入したほか、画家本人が来場する開幕に合わせて本展にも足を運んだ。熱狂的なファンを自認するこうした人たちの存在も、平松の不安は杞憂に終わるだろうと書いた理由の一端に挙げられ



【上】会場内に設けられた茶室に展示された平松作品
【下】ジヴェルニー印象派美術館に新たに収蔵された《モネの池 微風》(六曲一双屏風/2013)の展示風景

るだろうか。

開幕式で平松が披露した靴のエピソードには、後日譚がある。自身の靴とともに、妻の裕子さんの靴も描いて一緒にジヴェルニー印象派美術館へ残したのである。開幕の翌日、初日の感想を尋ねた私に平松が明かした。二人三脚で歩み続ける夫婦の縁、軌跡への万感の思いも2足の靴には込められている。

(東京工芸大学教授(近現代美術史))

平松礼二展《睡蓮画・モネへのオマージュ》

会期 開催中～8月31日

会場 パレルン国立アジア美術館

Museum für Asiatische Kunst, Staatliche Museen zu Berlin
Lanstraße8/Arnimallee25 14195 Berlin

展覧会・作品についての問合せ

平松礼二展実行委員会 (S&D)

東京都豊島区西池袋 2-36-1-510

Tel.03-5992-2002 Fax.03-5396-5500

doi-sd@chive.ocn.ne.jp

http://www.reiji-hiramatsu.com

